

Weekly report



株式会社 ミンカブソリューションサービス
東京都港区東新橋1-9-1

為替週間展望＝ドル円は底堅い動きか

〔9月11日からの1週間の展望〕

週間高低（カッコ内は日）				9月4日～9月8日	
始 値	高 値	安 値	終 値	前週比	
ドル・円	146.21	147.87(7)	146.02(4)	147.20	+0.98
ユーロ・ドル	1.0782	1.0809(4)	1.0686(7)	1.0716	-0.0064
=====					
国内株・金利／米国株・金利					
	終 値	前週末比		終 値	前週末比
日経平均株価	32,606.84	-103.78	日本10年債利回り	0.655	+0.022
ダウ平均株価	34,500.73	-336.98	米10年債利回り	4.244	+0.065
=====					

<来週の主要経済統計等>

- 9日 中国8月消費者物価指数、中国8月生産者物価指数
- 12日 英8月雇用統計
独9月ZEW景況感指数
- 13日 英7月鉱工業生産指数、英7月製造業生産指数、英7月貿易収支
ユーロ圏7月鉱工業生産指数
米8月消費者物価指数
- 14日 日本7月機械受注高
豪8月雇用統計
日本7月鉱工業生産指数確報値
スイス8月生産者・輸入価格
欧州中央銀行（ECB）政策金利、ラガルド総裁記者会見
カナダ7月卸売売上高
米8月小売売上高、米8月生産者物価指数、米新規失業保険申請件数
- 15日 中国8月鉱工業生産指数、中国8月小売売上高
ユーロ圏7月貿易収支
カナダ7月製造業出荷
米9月NY連銀製造業景気指数、米8月輸入価格指数
米8月鉱工業生産・設備稼働率
米9月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値

【前回のレビュー】米労働市場の鈍化傾向などからドルの上値はやや重い展開となっている。ただ、ドル円は一時的に売られても、長続きはしていない。また、日銀による緩和策の継続から円は売られやすい展開が続くとみられる。こうした中、ドル円はもみ合いながらも底堅い動きが見込まれるとした。

【ドル円は147円台まで上昇】

1日に発表された8月の米雇用統計では、失業率は3.8%となり、事前予想の3.6%や前回の3.5%を上回って悪化した。非農業部門雇用者数は前月比18.7万人増となり、事前予想の16.5万人増や前回の15.7万人増（18.7万人増から下方修正）を上回った。米労働市場の過熱感が後退するとの見方などからドル売りの動きに傾いた。

発表直後にドル円は144.45近辺まで売られたものの、その後は徐々に値を戻して146円台前半まで上昇した。米国の労働市場はおおむね堅調であるとの見方に加えて、その後に発表された8月の米ISM製造業景況指数が市場予想を上回ったことなどが好感された。

4日は米国市場がレイバーデーで休場となる中、ドル円は底堅いながらも146円台で小幅な値動きとなった。5日は原油高などを背景にインフレ警戒感から米長期金利が上昇したことで、147・80近辺までドル高円安が進んだ。6日以降はおおむね147円台での振幅となっている。7日には147・87近辺まで上昇したものの、その後は147円台前半まで軟化している。

11日の週は13日の米消費者物価指数、14日の米生産者物価指数、米小売売上高などに左右されやすいとみられる。特に注目される米消費者物価指数は、大方の事前予想では総合が前月比+0・5%、前年比が+3・6%と前回（それぞれ+0・2%、+3・2%）を上回る見通しとなっている。一方で、コアの予想は前月比+0・2%で前回と同水準、前年比は+4・3%で前回（+4・7%）から減速する見通しとなっている。

総合が前回から上振れ、コアが下振れとの予想はエネルギー価格の上昇の影響が大きいとみられる。市場予想と同水準か、上振れならドルは底堅い動きになるとみられる。この場合は年内の利上げがあと1回あると意識されそう。一方で市場予想から下振れすると、ドル売りに傾きやすいとみられる。ただ、日銀の緩和策継続を背景に円は売られやすいとみられる。

経済指標に左右されやすい動きが見込まれるものの、ドル円はおおむね底堅い動きとなりそう。米消費者物価指数など米経済指標の上振れがあれば、ドル円は150円を試す可能性も出てきそう。ドル円の目先の予想レンジは、145・00～150・50円。

日米の経済指標やイベントとしては、13日に米8月消費者物価指数、14日に日本7月機械受注高、日本7月鉱工業生産指数確報値、米8月小売売上高、米8月生産者物価指数、米新規失業保険申請件数、15日に米9月NY連銀製造業景気指数、米8月輸入価格指数、米8月鉱工業生産・設備稼働率、米9月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値などがある。

【ECB理事会では利上げは見送りか】

14日に欧州中央銀行（ECB）理事会が開催される。市場関係者の予想では、0・25%の利上げが年内にあと1回あるかどうかとの見方が広がっている。ラガルド総裁は4日の講演で、14日の理事会で利上げに動くか据え置くかに関して言及しなかった。おそらくECB内部でも意見が分かれているとみられる。なお、ラガルド総裁は前回（7月27日）の理事会の記者会見では、「利上げの判断はデータ次第」「次回の9月の会合で利上げをするかどうかは決まっていない」と9月の理事会での利上げを明言しなかった。

8月31日発表のユーロ圏消費者物価指数速報値は、コア前年比は+5・3%となり、前回の+5・5%を下回ったものの、市場予想の+5・2%を上回った。前年比は+5・3%とで前回と同水準となり、市場予想の+5・0%を上回った。インフレ率の下げ渋りが見られており、低下しにくくなっている。

インフレ率を低下させるために利上げが求められているものの、景気減速への警戒感も根強い。一段の利上げが景気を冷え込ませる可能性があり、あまり積極的に利上げに動きにくいという背景がある。今回のECB理事会では利上げは見送られるとみられる。積極的に利上げに動きにくい中、ユーロ圏の景気の先行き不透明感から、ユーロドルは上値の重い展開となりそう。ユーロドルの目先の予想レンジは、1・0500～1・0900ドル。

ポンドドルはドルの堅調な動きを前に上値の重い展開を続けてきた。9月21日の英金融政策委員会（MPC）で、英中銀は0・25%の利上げに動くとの見方が広がっている。年内にあと1～2回の利上げとみる向きが多い。8月中旬には年内にあと2～3回の利上げとの見方が強かったことで、景気減速懸念による利上げ回数の見通しが低下している。英国での景気への懸念やドルの堅調さを背景にポンドドルは軟調な推移が見込まれる。ポンドドルの目先の予想レンジは、1・2200～1・2700ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、9日に中国8月消費者物価指数、中国8月生産者物価指数、12日に英8月雇用統計、独9月ZEW景況感指数、13日に英7月鉱工業生産指数、英7月製造業生産指数、英7月貿易収支、ユーロ圏7月鉱工業生産指数、14日に豪8月雇用統計、スイス8月生産者・輸入価格、欧州中央銀行（ECB）政策金利、ラガルド総裁記者会見、カナダ7月卸売売上高、15日に中国8月鉱工業生産指数、中国8月小売売上高、ユーロ圏7月貿易収支、カナダ7月製造業出荷などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカソリューションサービスは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカソリューションサービスが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカソリューションサービス)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。